

# 被災地派遣レポート〈第106回〉

都市整備局都市づくり政策部広域調整課 川岸 雄一朗さん

## 1. はじめに

私は、平成25年1月1日から3ヶ月間、岩手県沿岸広域振興局に赴任しました。1年ほど前、自己申告の面談の際に、課長より被災地派遣の希望調査で希望の有無を聞かれ、必要があれば行きたいと話しましたが、その後、派遣が決まったと聞いた際には正直なところ不安の方が大きかったです。

## 2. 現地の状況と業務報告

私が赴任した沿岸広域振興局は、岩手県の釜石市と大槌町を管轄する部署です。私が着任した頃は被災からほぼ2年が経過していたため、市街地の瓦礫は処理場に集められており、被災した地域は大半が更地になっていて、従前の街並みがどのようなものであったかを想像すらしがたい状況でした。

また、高さが10m以上あるような巨大な防潮堤が津波で倒された現場を見るにつけ、自然の猛威の凄まじさを感じるとともに、土木職として私に何ができるのか自問自答する日々でした。

今回の大震災では、被災した陸閘や水門などの操作中に不幸にも多数の消防関係者が犠牲となりました。このため、陸閘や水門などを遠隔で機械制御を行う環境整備するための委託発注が私の主要な業務でした。しかし、実際に操作を行うのは被災した消防団員であり、消防署の再編が決まっていない状況下で、消防団が業務増を受け入れてくれるのか、地形が急峻な中で無線が届く屯所がどこなのかなど課題が山積していました。派遣期間中には、陸閘や水門などの位置や調査などを行ったり、管轄の市町や消防関係者との調整会議を行いました。遠隔制御化について関係者の理解が得られるところまでには、残念なことに至りませんでした。

## 3. おわりに

これまで縁もゆかりも無かった土地で、真冬の寒い時期に被災地に行くことは不安も大きく、色々悩むことはありましたが、都などの派遣者や岩手県の職員などの協力により、何とか乗り越えることができましたと思います。また、被災された方が県の臨時職員として働かれていて、派遣者に対して生活面や仕事の面で多大な支援をして頂いたことは、非常に有難く感謝しています。被災地の一日も早い復興を祈念いたしますが、土地の処理など課題が山積しており、前途多難な状況に変わりはないと思います。今後とも、東京都が被災地支援を長く続けていくことを切望いたします。